光　市　記　者　発　表　資　料

令和3年1月4日

件　名
公務始めの市長訓示について

内　容
令和3年1月４日（月）午前8時30分から庁内放送で行いました、職員に対する市川市長の年頭挨拶の内容について別添のとおりお知らせします。

問い合わせ
担当課　光市総務課 総務法令係 担当者　坪井　亮　　電　話 0833-72-1401（ダイヤルイン）

2021 年公務始めの訓示

明けましておめでとうございます。
私自身初めての経験ですが、庁内放送を使っての皆さんへの挨拶をいたします。
皆さん、昨年は本当にお世話になりました。いつ収束するか分からないコロナ禍の中で新しい年を迎えましたが、本年もよろしくお願いいたします。
さて新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、政府や県知事からは「不要不急」の行動を慎むように、再三、国民・県民に要請が重ねられています。
このような中、コロナ禍に関して、京都大学名誉教授佐伯啓思さんの長文の記事が、年末のある新聞紙上に掲載され、その中で彼は、「不要不急」の意味を問いました。
是非全文を読んでもらいたいのですが、本日は一部を紹介いたします。

今回のコロナ騒動は、はからずも「必要」と「不要不急」の区別を前景へと押し出した。確かに、この区別はあいまいである。だがそれでも、われわれは、何が必要で何が不要不急かを改めて問うた。人は最低限の「必要」だけで生きているわけではない。しかしまた、「不要不急」の無限の拡大は、人の生から本当に必要なものを奪い去りかねない。そしてわれわれは「必要なもの」と「不要なもの」の間に、実は、「大事なもの」があることを知った。

信頼できる人間関係、安心できる場所、地域の生活空間、なじみの店、医療や介護の体制、公共交通、大切な書物や音楽、安心できる街路、四季の風景、澄んだ大気、大切な思い出。

これらは市場で取引され、利潤原理で評価できるものではない。またいくら「不要不急」を市場で拡張し、経済を成長させても得られるものではない。むしろ過度な市場競争と経済の拡張がその障害になりかねないであろう。「必要」も「不要不急」も、この「大事なもの」によって支えられ、またそれを支えるべきものである。

今紹介した文章は、結論という部分ですが、この前にあるものを読むことによって、それがより明確になります。さて
信頼できる人間関係、安心できる場所、地域の生活空間、なじみの店、医療や介護の体制、公共交通、大切な書物や音楽、安心できる街路、四季の風景、澄んだ大気、大切な思い出。
私は、これこそが、私たちの目指す「ゆたかな社会の基本要素」だと感じています。

今年は「ゆたかな社会」を目指す「第 2 次総合計画」の最終年度であり、さらに、これに続く「第 3 次総合計画」も策定しなければなりません。

「ゆたかな社会の基本要素」を実現することが「市民への約束」であり、それを実現するためには、職員一人一人の「知恵と汗」が必要です。

有名な京料理の巨匠、西健一郎さんは「料理に一番重要なのは、手間を掛けることだ。特に安い素材にこそ手間を掛けるべきだ。手間を掛けることで、味の邪魔をするもの、例えばアクなどを取り除いていく。」と述べています。

私たちは、自分自身を「高級素材」だと思っている人間は少なく、むしろ「安い素材」だと思っている人間の方が多いと私は信じています。だからこそ、西さんの言うごとく、私たちは自分自身の成長には、手間を掛けて行く必要があります。

それでは、どうやって手間を掛けるのでしょうか。

キーワードは「自助・共助・公助」です。

まず、自分自身で自分を磨く、仕事に関係するものはもちろん、関係のない書籍等も読み考える力を養う、これが自助です。

次に、係長以下の先輩・同僚・後輩と議論、対話を重ねる、これが共助です。

それでは公助とは一体なんでしょうか？

私は、仕事上で課長・部長の指導を受ける、あるいは議論を重ねることであると思っています。公助で重要なことをもう一つ申しますと、「研修」です。総務からの指名、あるいは募集もありましょうが、せっかく受ける研修を、市民の皆様のために受けるのか、ただその時間を無為に過ごすのかでは、天と地ほどの差があります。

今年も、「ゆたかな社会」を目指すために、自分自身という「素材」を自助・共助・公助で磨き上げましょう。よろしくお願いします。

令和３年１月４日

光市長　市　川　　熙